

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

—国際穀物市場の影響—

富岡 庄 一

はじめに

以前、筆者は、主として19世紀後半におけるロシアの貿易構造を分析することにより、1880年代に転換が生じて、食料品輸出体制が成立することを明らかにした。

即ち、ロシアの貿易は全体としてかなり急な増加傾向を示し、貿易収支は、1860年代後半—70年代を例外として、黒字基調であった。そのような状況の下で、1880年代を境として、ロシアの貿易構造は、19世紀初め以来の原料・半製品を輸出して食料品を輸入するという構造から、逆に食料品を輸出して原料・半製品を輸入する構造に転換する。なお、完成品の輸入は、19世紀の初頭も末も輸入総額の3割前後と変わりがなかった。ところで、このような食料品輸出体制を主に支えていたのが穀物輸出であった。そして、輸出される穀物の種類について見た場合、同じく1880年代を画期として、それまで殆ど専ら小麦に依存していた（1860年代後半—70年代には例外的にライ麦とエン麦の輸出が増える）のが、小麦に加えて大麦が次第に重要な地位を占め始めるようになる。一方、ライ麦とエン麦の輸出は相対的かつ絶対的に減少してゆく。なお、19世紀末葉になると、穀物を主役とする食料品輸出を脇から支えるべく砂糖が登場してくる⁽¹⁾。

さて本稿の課題は、まず、以上で述べたような傾向が20世紀に入ってからも続くことを確認し、次にロシアからの穀物輸出について、新たに輸出先別の分析を行って、前述のような穀物輸出動向の変化が、ロシアから穀物を輸入する国々の市場状況（ここでは、差当り貿易動向を中心とする）によって強く規定されていたことを明らかにすることにある⁽²⁾。

注

- (1) 富岡庄一「ロシア貿易構造の転換—統計的分析による一試論—」(北星学園大学経済学部紀要『北星論集』1983年第21号)
- (2) 本稿は、1984年10月末に脱稿した論文「世界市場とロシア農業」(『ロシア帝国主義研究(仮題)』(ミネルヴァ書房より1985年に出版予定)の第1章(3)に収録)において、紙数の都合上削除せざるを得なかった統計資料を提示・分析し、更にロシアの穀物輸出をめぐる国際関係についてより詳細に検討したものである。上記論文の叙述と出来るだけ重複しないように心掛けたつもりであるが、部分的にはそのような箇所もあることをおことわりしておく。又、注(1)に示した論文では、20世紀に入ってからの統計資料が不十分であったので、最初に「20世紀初めの貿易構造」の項をもうけた。

1. 20世紀初めの貿易構造

20世紀に入ってからのロシアの貿易の趨勢は、1900年代前半に輸入が停滞しているものの、19世紀と比べて、全体的に輸出入ともに急激にかつ順調に伸びている。貿易収支も、一貫して黒字安定である。

もっとも、大戦直前期になると、輸入の急増によって、黒字巾が急速に狭まってゆく。これは、当時のロシアでも議論の的となる。輸入増の原因は、完成品の輸入の急増であった。完成品輸入における増加の2/3はドイツからのものであった⁽¹⁾。

20世紀初めのロシアの貿易構造について見てみよう(表. 1)。貿易品目を、食料品、原料・半製品、完成品などに分けて見た場合、1880年代に成立する貿易構造、つまり輸出では食料品が5割以上を占め続け、原料・半製品が35%前後に安定し、又輸入では原料・半製品が5割以上に達するという構造。その構造は、20世紀に入ってからも基本的に変らない⁽²⁾。

輸出総額に占める穀物の比率は、1899—1903年に48%、1904—08に48%、1909—13年に47%である⁽³⁾。この点でも、1880年代に成立する輸出構造は、20世紀に入ってからも基本的に変化していない。つまり、輸出総額に占める穀物の割合は、1880年代以後5割前後に安定するようになるのである。

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

表.1 20世紀初めのロシアの貿易構造

(全輸出に占める%)	1901-05	1906-10	1911-13
食料品	64.1	61.6	59.3
原料・半製品	31.7	34.3	36.7
完成品	2.5	2.3	2.0

出典 Вестник финансов, промышленности и торговли, 1914, №8, стр. 340-1

(全輸入に占める%)	1901-05	1906-10	1911-13
食料品	15.7	15.4	13.3
原料・半製品	55.7	53.6	49.9
完成品	28.3	30.8	36.5

数字は全て年平均

出典 Вестник финансов, промышленности и торговли, 1914, №9, стр. 381

穀物の種類別輸出動向は、次の如くである(表. 2)。1860年代前半までは、小麦が圧倒的な比重(6割以上)を占めていたが、60年代後半以後70年代にかけて、小麦の割合が急低下し、代ってライ麦・エン麦の比重が大きく上昇する。しかし、80年代以後になると、小麦の比重が4割前後に安定し、それまで殆ど輸出されなかった大麦の割合が急上昇し始め、90年代前半にはライ麦・エン麦を抜き去る。そして大戦直前期(1911-13)には、小麦の比重の低下ともあいまって、大麦が第1位の輸出穀物となる。つまり、80年代以後食料品輸出体制の成立を支えていた穀物輸出の安定が、従来からの重要な穀物であった小麦に加えて大麦が穀物輸出のもう一つの柱として登場して来たことによって可能となったという点は、第一次大戦前まであてはまる。なお、20世紀に入ってからのライ麦の比重の低下は顕著で、1900年代後半には、エン麦にも抜かれてしまう。

以上から、1880年代に成立したロシア貿易構造の特質(食料品輸出台制)は、第一次大戦直前まで基本的に持続することが確認されたと思われる。

表.2 主要穀物の輸出動向

	穀物の全輸出品 (百万ブード)	小 麦	大 麦	ライ麦	エン麦
		(全輸出品に占める各穀物の%)			
1861-65	79.9	62.8	6.3	17.2	7.5
1866-70	130.1	59.0	5.8	15.8	11.7
1871-75	194.1	47.5	6.2	27.4	12.3
1876-80	287.0	38.5	7.2	29.0	14.9
1881-85	301.7	41.2	10.7	20.3	17.0
1886-90	413.7	39.4	14.9	19.9	14.8
1891-95	441.1	38.8	21.0	12.9	12.9
1896-00	444.2	37.6	18.3	16.8	11.0
1901-05	608.9	37.9	20.3	12.6	12.6
1906-10	615.3	37.1	29.5	6.9	9.2
1911-13	675.5	29.9	33.1	6.0	8.3

数字は全て年平均。

出典 П.И.Ляшенко,указ.соч.,стр.51,53-4

注

- (1) M. Miller, The Economic Development of Russia 1905—1914 (London, 1967) p. 61
- (2) 但し、第一次大戦直前に向かって、輸出では、食料品の比重の低下、原料・半製品のそのの上昇傾向が、そして輸入では、原料・半製品の比重の低下、完成品のそのの上昇傾向がみられる。このような傾向が一時的なものであったのか、それとも貿易構造の新たな転換、つまり世界経済におけるロシアの位置づけの変化を予想させるものであったのかは俄に断定しがたい。
- (3) Вестник финансов, промышленности и торговли, 1914, No. 8, стр. 341

2. ロシアからの穀物輸出先

19世紀半ば—20世紀始めにおけるロシア穀物の輸出先の動向について、先ずはロシア側の貿易統計を用いて分析してみよう(表.3)。

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

表.3 主要穀物の輸出先

(穀物輸出全体に占める%)

(全穀物)	イギリス	フランス	イタリア	ドイツ	オランダ
1861-65	39.4	12.5	6.0	15.1	4.3
1866-70	47.3	12.7	3.7	11.1	2.5
1871-75	27.9	7.9	2.7	18.9	5.0
1876-80	24.2	10.6	1.8	20.6	5.7
1881-85	36.1	9.0	3.0	21.1	9.1
1886-90	42.8	7.3	6.6	12.6	11.0
1891-95	31.9	10.4	7.6	11.9	10.5
1896-00	21.9	10.2	9.5	17.7	17.9
1901-05	22.8	7.7	10.9	18.3	20.5
1906-10	18.9	7.1	8.8	25.3	22.1
1911-13	12.7	8.1	9.7	32.1	23.2
(小麦)					
1861-65	48.9	19.1	9.5	9.8	0.1
1866-70	57.1	20.5	6.6	6.0	0.5
1871-75	45.9	19.1	7.1	8.5	2.1
1876-80	34.9	22.2	5.1	16.8	3.4
1881-85	37.0	12.7	6.3	16.2	8.1
1886-90	42.5	11.9	13.6	7.6	7.1
1891-95	28.6	16.2	15.6	6.0	8.7
1896-00	18.1	18.5	20.4	7.0	15.2
1901-05	19.6	13.6	23.2	6.3	18.1
1906-10	20.2	12.1	18.5	7.8	21.3
1911-13	15.4	15.0	24.2	6.6	21.8
(大麦)					
1861-65	41.4	3.5	1.3	6.8	36.7
1866-70	64.2	5.7	0.2	7.5	13.7
1871-75	43.8	1.8	0.2	11.3	25.9
1876-80	44.0	5.4	0.4	11.4	15.4
1881-85	48.7	2.5	0.4	9.6	12.7
1886-90	51.4	2.7	1.3	11.6	12.9
1891-95	33.2	4.2	1.3	14.7	10.0
1896-00	25.2	3.9	0.5	25.6	14.1
1901-05	22.0	1.8	0.4	36.7	15.9
1906-10	13.4	0.6	0.4	53.2	18.3
1911-13	8.5	1.4	0.3	61.0	18.0

北 星 論 集(経) 第22号

(穀物輸出全体に占める%)

(ライ麦)	イギリス	フランス	イタリア	ドイ ツ	オランダ
1861-65	7.1	0.2	0.2	31.1	7.5
1866-70	18.2	0.4	0.2	21.3	4.2
1871-75	6.7	0.4	0.1	26.5	5.7
1876-80	6.2	0.8	0.0	25.7	6.0
1881-85	20.4	0.6	0.0	39.6	9.5
1886-90	28.1	0.9	0.9	23.5	17.3
1891-95	19.6	0.4	0.8	29.7	16.2
1896-00	11.3	0.9	0.4	35.8	23.8
1901-05	9.9	0.5	0.6	29.6	31.7
1906-10	12.5	0.4	0.7	23.8	38.2
1911-13	7.0	1.5	1.0	23.5	41.9
(エン麦)					
1861-65	74.7	9.4	1.6	6.6	2.6
1866-70	69.6	11.2	0.2	10.7	1.4
1871-75	57.1	6.4	0.2	23.2	2.4
1876-80	48.0	17.1	0.1	17.4	5.2
1881-85	45.4	14.3	0.2	18.3	8.9
1886-90	54.5	8.6	1.0	12.0	10.8
1891-95	51.8	12.7	0.6	7.5	11.2
1896-00	45.9	6.2	0.8	13.3	24.6
1901-05	46.3	6.2	1.0	13.2	23.9
1906-10	36.4	12.3	2.2	13.3	25.2
1911-13	23.5	15.2	0.9	14.0	34.0

数字は全て年平均。

出典 П.И.Лященко,указ.соч.,стр.72-4

穀物全体の輸出先について見た場合、次のことが言えるであろう。1900年代前半まで、最大の輸出先はイギリスである。但し、19世紀半ば以降、イギリスの地位はかなり急速に低下し続けている。特に、1870年代と1890年代後半以降とにおける、比重の低下が顕著である。そして、1900年代後半以後は、ドイツ、オランダに抜かれて第3位に落ちる。

ドイツは、19世紀の間は、大体において、イギリスに次ぐ輸出先であった。ただ、「独露関税戦争」の時期を含む1880年代後半—1890年代前半には、比重が大きく低下する。しかし、1890年代後半以降は、比重が急

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

速に上昇し始め、1900年代後半以後は、第1位の輸出先となる。同時期に、第2位になるのがオランダである。オランダは、1880年代後半以後、ドイツと絡み合うようにして、比重が上昇する。

フランスは、19世紀半ばから20世紀始めにかけて、第3位から第5位へと、比重が緩慢にはあるが低下してゆく。他方、イタリアは、当初は低い地位しか占めていなかったが、1880年代後半から比重が上昇傾向に転じ、20世紀に入るとフランスを抜いて第4位を確保するようになる。

穀物全体について、輸出先の動向をまとめると、次のように言えよう。時期を下るに従って、ロシアからの穀物輸出が相対的に増加したのはドイツ、オランダ、イタリアで、逆に減少したのはイギリス、フランスである。とりわけ、ドイツ、オランダの台頭、イギリスの衰退が顕著である。

小麦については、次のような状況である。1890年代前半まで、イギリスが断然トップであったが、比重は急速に低下していた。その結果、90年代後半—1900年代後半の時期は、イタリア、オランダ、イギリスがトップ・グループを形成する混戦状態を迎えるが、第一次大戦前（1911—13）になると第1位イタリア、第2位オランダ、第3位イギリスに落ち着く。イタリアは、1880年代後半以降比重がかなり急速に上昇してきた結果である。オランダも、1890年代後半以後比重の上昇が顕著である。なお、フランスとドイツの地位は、長期的にみて、停滞ないしは低下傾向にあった。ただ、イギリスの比重が下がる1870年代後半—80年代前半に、ドイツのそれがピークを迎えることには一応注目すべきであろう。

大麦について見てみよう。1890年代前半まで、イギリスが第1位であるが、その比重は低下傾向にあった。対照的に、ドイツが90年代後半に急速に台頭してイギリスに追い付き、1900年代前半にはイギリスを抜き去って、以後圧倒的な地位を確保する。イギリスの比重は極めて低位となる。なお、オランダは初期の頃を別にして、停滞気味である。

ライ麦の場合はどうであろうか。ドイツが一貫して一定の重要な地位を占めている。但し、第一次大戦前には比重がやや低下する。一方、オランダは、当初、僅かの比重しか占めていなかったが、1880年代後半以後徐々に上昇し、遂に20世紀に入ってドイツを抜いて第1位になる。イギリスは、1880年代—90年代前半を除いて、比較的低位に推移する。

エン麦について。第一次大戦前を除いて、イギリスが第1位を保持する。但し、その比重は低下傾向にあった。それに対して、オランダは、初めのうちは極めて低位にあったが、徐々に比重を増し、特に1890年代後半以後は第2位を確保し、そして第一次大戦前にはイギリスを抜いて第1位になる。フランス、ドイツは、全時期を通じて、大体横這いである。

以上、ロシアからの主要四穀の輸出先に関する分析をまとめると、次のように言えよう。イギリスの衰退が顕著であったのは、小麦、大麦、エン麦においてである。ライ麦におけるイギリスの比重は、元々そう大きくなかった。他方、小麦、ライ麦、エン麦におけるオランダ、大麦におけるドイツ、小麦におけるイタリアの台頭は顕著である。そして、19世紀半ば—20世紀初めの時期において、そのような傾向が明瞭に現れる転換期になっているのが、大体において80年代であることが分かる。

ファルクス (M. E. Falkus) は、小麦輸出のパターンが1880年代以後大きく変化することを指摘している。つまり70年代までは、ロシアから輸出される小麦は、主としてイギリス向けの比較的軟質の小麦 (ギルカ種やオジマヤ種) であった⁽¹⁾。しかし、80年代以後、ロシアの小麦輸出は、イギリスへの軟質小麦の輸出というパターンから、南欧 (イタリア、南フランス、ギリシアなど) への硬質小麦の輸出と中欧 (ドイツ、スイスなど) への軟質小麦の輸出というパターンに転換していった⁽²⁾。80年代は、ロシアから見て、穀物輸出市場が大きく変化する画期だったのである。

ところで、ロシアの穀物輸出におけるドイツの比重を検討するにあたって、オランダの果たした役割を無視してはならないとは、よく指摘されることである。つまり、オランダは輸入した穀物のかなりの部分をドイツに再輸出していた。例えば、1913年には、オランダは輸入した小麦総量の約76%、ライ麦の約53%の量をドイツに輸出している⁽³⁾。ところが、ロシアの貿易統計では、オランダ経由のドイツへの輸出は、オランダへの輸出と表示されたのである。リャシチェンコはその点を勘案して、1911—13年における、ロシアの小麦輸出全体に占めるドイツの比率を1/4、ライ麦は1/2、エン麦は1/3、そして大麦は約2/3 (75%前後) と推定している⁽⁴⁾。つまり、主要四穀全てにおいてドイツが最大の輸出先だったのである。

穀物の貿易統計が、必ずしも実際の輸出入を反映していないのは、以上の点につきない。例えば、ジェノアやロッテルダムに輸出されたロシアの小麦（従って、ロシアの統計ではそれぞれイタリア、オランダへの輸出となっている）の内の或る部分は、スイスに再輸出されたのである。ロシアはスイスに対する主要な小麦供給国であった。又、輸入国側の貿易統計でも、必ずしも実体が正確に示されていた分けではない。例えば、イギリスの統計で、ドイツからの輸入小麦と示されているものの中に、ケーニヒスベルクやダンツィヒ経由のロシア小麦が混入していたと言う⁽⁵⁾。

注

- (1) M. E. Falkus, *Russia and the International Wheat Trade 1861—1914*, *Economica*, No. 33 (1966), p. 418
- (2) *Ibid.*, pp. 421—2
- (3) Koninkrijk der Nederlanden, *Statistiek Van Den In-, Uit- En Doorvoer, over het Jaar 1913*. blz. 11—12, 240
- (4) П. И. Лященко. *Зерновое хозяйство и хлеботорговые отношения России и Германии в связи с таможенным обложением*. Пгр., 1915, стр. 187—8
- (5) M. E. Falkus, *op. cit.*, p. 424

3. ロシア穀物の主要な輸入国

ロシアの穀物輸出の動向は、穀物を輸入する国々の市場状況に強く規定されていたものと思われる。そこで、ロシア産穀物の主要な輸入国をいくつか取り上げて検討しよう。

まず、イギリスである。イギリスの穀物輸入の特徴は、小麦・小麦粉の輸入が飛び抜けて多いことである。但し、表. 4によれば、第一次大戦前における小麦粉の輸入が減少しているのが注目される。実は、イギリスの小麦粉輸入は、1900年代に入って減少し始める。その原因は、イギリスの製粉業が発展し、小麦粉の生産が増加したことにあった⁽¹⁾。

19世紀半ば—20世紀初めにおける、イギリスの小麦・小麦粉の輸入先を大雑把に見ると(表. 5)、1860年代後半には、小麦ではロシア、小麦

表.4 イギリスの穀物輸入

(百万cwts)	小 麦	小麦粉	大 麦	エン麦
1866-70	31.8	4.4	7.3	9.0
1886-90	55.9	16.0	16.7	15.1
1908-12	100.4	10.8	20.5	17.2

数字は全て年平均。

出典 農業総合研究所『世界農産物貿易統計集』(昭和53年)72-4ページ

表.5 イギリスの小麦・小麦粉の輸入先

(全輸入量に占める%)	1866-70		1886-90		1908-12	
	小 麦	小麦粉	小 麦	小麦粉	小 麦	小麦粉
ロ シ ア	33.0	1.7	25.5	0.9	15.8	0.0
ド イ ツ	18.2	18.4	3.5	5.7	0.2	4.1
フ ラ ン ス	3.0	34.3	0.0	0.6	—	3.9
オーストリア=ハンガリ	2.5	4.4	0.2	9.9	—	1.3
ル マ ニ ア	2.0	10.0	3.5	0.0	1.1	0.5
合 衆 国	22.8	25.3	37.2	76.1	17.0	57.8
アルゼンチン	—	—	2.1	0.0	20.0	0.9
カ ナ ダ	4.3	6.2	3.7	5.8	16.9	25.2
英 領 イ ン ド	—	—	16.5	0.0	16.1	0.1
オーストラリア	—	—	?	0.4	10.8	4.2

数字は全て年平均。

出典 農業総合研究所『世界農産物貿易統計集』(昭和53年)72-3ページ

粉はフランスが第1位であったが、80年代後半には小麦、小麦粉共に合衆国が第1位に就き、そして第一次大戦前になると、小麦の輸入先はロシア、合衆国、アルゼンチン、カナダ、英領インド、オーストラリアなどに分散し、小麦粉は依然として合衆国が過半を占めるものの比重は低下することが分かる。イギリスの小麦輸入におけるロシアの退潮は顕著である。その原因は、ひとつは海上輸送費の低落による合衆国などとの競争の激化、もうひとつはイギリスが要望する小麦の品質にロシアが応えられなかったことにある。つまり、ロシア産の小麦は夾雑物が多かつ

たのと、貯蔵施設の不備のために変質したものがあったためである⁽²⁾。当時、エレベーターをはじめとする貯蔵設備の整備は、ロシアの穀物輸出を促進する上で焦眉の課題の一つであった⁽³⁾。又、パンに対するイギリス人の嗜好に、ロシア産小麦が合わなかったとも言われる⁽⁴⁾。ロシアからの小麦粉輸入は無に等しかった⁽⁵⁾。

なお、イギリスの大麦輸入においては、ロシアは、1860年代後半にはドイツやデンマークに譲っていたが、80年代後半には全輸入量の48.8%を占めて第1位にあり、以後比重はやや低下するものの、主要な供給者としての地位を維持し続ける⁽⁶⁾。

こうして、1880年代以降、イギリスの穀物（特に小麦）輸入におけるロシアの地位は大きく後退する。ただ、大麦だけは、ロシアが相対的に優位にあった。

次に、80年代以後、ロシアからの硬質小麦の輸出先として、新たに重要性を増したイタリア、フランスについて見てみよう。

ロシアからイタリアへの小麦輸出は、ロシア側の統計によれば、1880年代後半以後急速に増加して、第一次大戦前には第1位の輸出先になる。オランダ経由のドイツへの輸出を考慮しても、ドイツに次いで第2位である。

イタリアの側から見た穀物輸入状況を、取敢えず20世紀初めの分について検討してみよう（表. 6）。

イタリアの小麦輸入は、年を経るに従ってかなり急激に増加している。輸入先としては、ロシアが他を大きく引き離して第1位を維持している。但し、その占める割合は低下傾向にあり、第1次大戦直前になると、ルーマニアの台頭を無視出来なくなっている。エン麦の全輸入量は、小麦程ではないが、徐々に増加している。当初ロシアは、ルーマニアに次いで大きな比重を占めているが、第1次大戦前になると激しく後退し、代ってアルゼンチンが圧倒的な地位を占めるに至る。なお、アルゼンチンの急速な台頭は、1900年代後半から生じている。

イタリアでは、1878年以降、保護貿易政策への転換が始まり、1887年の関税によってより強化された。更に、1898年にかけて、小麦の輸入関税が漸次引き上げられてゆく⁽⁷⁾。ところで、イタリア国内で、人口の増加、工業化がかなり急速に進んで、農産物に対する需要が増大したものの、

表.6 イタリアの穀物輸入

小 麦	1901-05	1906-10	1911-13
全輸入量(百万ブード)	65.6	71.7	101.6
ロシアの占める%	79.2	64.7	52.5
合衆国の占める%	3.6	10.4	4.7
アルゼンチンの占める%	1.1	6.8	10.7
ルーマニアの占める%	14.7	14.6	23.1
エ ン 麦	1901-05	1906-10	1911-13
全輸入量(百万ブード)	2.2	4.7	8.0
ロシアの占める%	35.5	30.5	6.8
ルーマニアの占める%	38.8	31.6	13.8
アルゼンチンの占める%	0.9	28.1	69.8

数字は全て年平均

出典 П.И.Лыченко, укав. соч., стр.68-9

イタリア農業はそれに十分応えることが出来なかったと言われる。又高品質の硬質小麦（スパゲッティなどの製造に用いる）に対する需要が大きかったが、国内での生産は少なかった。この種の小麦はロシアで多く栽培された。特にアゾフ地域の硬質小麦が好まれた。従って、イタリアの穀物関税の引き上げは、ロシアからの小麦輸入にさほど影響しなかったと言われる⁽⁸⁾。但し、イタリア市場での競争は次第に激化しつつあった。

なお、前述の如く、ロシアからイタリアに輸入された小麦は、全て国内で消費されたわけではなく、或る部分（特に硬質小麦以外）はスイスなどに再輸出された⁽⁹⁾。

ロシアの穀物輸出におけるフランスの地位は、小麦の場合、19世紀半ば頃にはイギリスに次ぐ第2位にあったが、順位は次第にドイツ・オランダやイタリアに抜かれてゆく。ただ、ロシアの小麦輸出全体に占める比重はあまり低下していない。

フランスの側から、この間の小麦の輸入動向を見てみよう（表.7）。1866—70、1886—90、1909—13年の3つの時期を比べた限りにおいて言えることは、全輸入量は、60年代後半から80年代後半にかけて著増する

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

表.7 フランスの小麦純輸入

	1866-70	1886-90	1909-13
全輸入量(百トン)	3725	9878	10389
ロシアの占める%	26.1	21.9	12.9
ドイツ	14.0	0.3	10.4
ベルギー	4.7	2.2	1.5
トルコ	36.2	4.2	0.02
合衆国	2.5	20.5	11.1
英領インド	0.3	6.1	5.7
ルーマニア	—	4.9	15.0
オーストラリア	—	4.2	6.3
アルゼンチン	—	2.9	15.0
アルジェリア	0.6	9.1	12.7

数字は全て年平均
出典 農業総合研究所「世界農産物貿易統計集」(昭和53年)101ページ

が、以後は停滞気味である。又、輸入先は、60年代後半にはトルコ、ロシアからが多いが、80年代後半にはロシア、合衆国が大きな比重を占め、そして第一次大戦前になると、ロシア、ドイツ、合衆国、ルーマニア、アルゼンチン、アルジェリアなどに分散化する。

フランスで保護貿易主義が復活したのは1881年である。農産物の輸入に対してかなりの関税がかけられるようになるのは1885・87年以後である。それは、1892年の「メリーヌ関税」で一層強化される⁽¹⁰⁾。

このような保護措置の下で、フランスの小麦生産は、量的には大体国内需要を賄えるようになったと言われる。しかしだからといって、小麦の輸入が全く停止した分けではない。フランスの製粉業が輸入を必要としていたのである。就中、マカロニなどに用いる小麦粉を製造する場合、硬質小麦(フリント種)が必要であったが、それは輸入に依存せざるを得なかった。ロシアはこの種の小麦の最大の輸出国であった。その意味では、フランスの高関税は、ロシアからの小麦(特に硬質小麦)輸入にさほど影響しなかったと思われる⁽¹¹⁾。但し、フランス製粉業の発展は、フランスからの小麦粉(ロシアからの小麦を原料とする)の輸出を増や

し、トルコ、エジプトなどに進出してゆくことになった。ところが、それら市場は、従来、ロシア産小麦粉の限られた輸出先であった⁽¹²⁾。

最後に、ロシア穀物の最大の輸出先だったドイツである。

19世紀後半—20世紀初めにおけるドイツの主要四穀の貿易動向が、表. 8 に示されている。それによれば、1870年代前半まで、ドイツでは、小麦だけは輸出が輸入を凌駕していたが、70年代後半以降輸入のほうが多くなり、特に1890年代前半以後小麦の輸入量は急激に増える。大麦の輸入量も、同時期頃を境にして急増する。ライ麦・エン麦も、70年代後半以後輸入の絶対量が増加する。つまり、この時期を境にしてドイツは穀物輸入国に転じていったと言えよう。但し、ライ麦とエン麦は1900年代に入って輸出が増えてゆき、ライ麦は1900年代後半になると輸入より輸出の方が多くなる。

表. 8 ドイツの穀物貿易

(千トン)	小 麦		大 麦		ライ麦		エン麦	
	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出
1866-70	430.4	620.4	160.3	152.2	404.8	157.3	148.1	128.3
1871-75	407.2	457.9	236.5	117.1	700.4	151.9	193.2	111.9
1876-80	771.3	548.8	352.1	203.6	1087.7	131.3	294.5	109.1
1881-85	603.6	49.3	364.0	68.8	748.4	9.9	276.4	25.5
1886-90	469.9	2.6	539.3	26.1	759.2	1.8	175.3	5.4
1891-95	1079.4	30.0	837.4	18.0	646.8	17.4	218.4	15.0
1896-00	1394.8	174.8	1026.0	19.3	851.2	94.8	444.1	54.7
1901-05	2089.3	135.9	1332.8	31.5	739.6	216.4	520.9	138.1
1906-10	2266.0	209.7	2353.8	2.1	453.6	506.4	450.6	364.8
1911-13	2443.9		3280.9		427.5		599.5	

数定は全て年平均。

出典 P. И. Лященко, укав. соч., стр. 116-7, 70

主要四穀の相互関係についてより詳しく見ると次のことが分かる。1880年代までは、ライ麦の輸入が相対的に多い。しかし、1890年代以降は、小麦と大麦の輸入が急上昇し、ライ麦は急降下してゆく。1900年代に入

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

ると小麦と大麦が輸入穀物の中で圧倒的な地位を占めるようになる。特に、大麦の伸張は顕著で、1900年代後半以後、小麦を抜いて最大の輸入穀物になる。

次に輸入先別に見てみよう。

表. 9によれば、80年代後半のドイツは、小麦の過半、ライ麦・エン麦の圧倒的部分をロシアから輸入していた。大麦は、かなりの量をロシアから輸入したが、それ以上にオーストリア＝ハンガリーに仰いでいた。

表. 9 ドイツ：1886-90年平均の
純輸入合計に占める各国の%

	小麦	大麦	ライ麦	エン麦
ベルギー	3.9	1.6	2.7	2.4
オランダ	6.1	3.0	6.3	7.8
オーストリア＝ハンガリー	21.9	48.0	1.2	6.3
ルーマニア	4.3	4.0	1.9	0.2
ロシア	52.1	33.9	76.1	81.1
合衆国	5.4	0.1	1.0	0.4

出典 農業総合研究所「世界農産物貿易統計集」(昭和53年)42-9ページ

20世紀初めの輸入先はどうか(表. 10)。20世紀に入ってから輸入量が年々増大しつつあった小麦・大麦では、小麦の輸入先は、ロシアが第1位を保持しているが、合衆国、アルゼンチンも決して無視できぬ存在になっている。大麦の場合は、ロシアが圧倒的で、その比重は益々上昇する傾向にある。輸入量が停滞又は減少していたライ麦・エン麦では、ロシアが圧倒的な比重を占めている。但し、エン麦は、第1次大戦に近づくにつれて、ロシアの比重が低下傾向にあり、一方アルゼンチンの地位が上昇している。

ドイツは、1870年代に、工業化・都市化が進んで、それまでの小麦過剰国から小麦不足国に変わった。以後ドイツは、主要な小麦輸入国の一つになる。ドイツの小麦自給率は、1886-90年にはまだ87%あったが、1901-05年には64%にまで下落したと言われる⁽¹³⁾。そのドイツに対し、ロシアは、当初、小麦の供給国として他を圧していたが、次第に、合衆国・

表.10 ドイツ: 5年平均の
輸入総量に占める各国の%

(小 麦)	1901-05	1906-10	1911-13
ロ シ ア	36.4	38.0	29.7
合 衆 国	29.4	18.9	23.7
アルゼンチン	19.0	27.9	20.9
ドナウ諸国	10.6	10.1	9.1
(大 麦)	1901-05	1906-10	1911-13
ロ シ ア	68.3	83.3	83.1
合 衆 国	1.0	0.6	2.0
(ライ麦)	1901-05	1906-10	1911-13
ロ シ ア	87.6	81.0	87.4
ドナウ諸国	6.8	13.4	7.3
(エン麦)	1901-05	1906-10	1911-13
ロ シ ア	84.5	71.8	64.2
合 衆 国	4.2	5.0	6.9
アルゼンチン	0.3	10.7	23.1

出典 П.И.Лященко, указ. соч., стр.70の表より作成

アルゼンチンがロシアの地位を脅かすようになる。

更に、第一次大戦に近づくにつれ、ドイツからの小麦(粉)の輸出が徐々に増え始める。1911年度には輸出が輸入の20%に達したという。しかも、小麦粉の主要な輸出先として、ロシア領フィンランドがスイスに次ぐ第2の位置を占めていた⁽¹⁴⁾。

ドイツの大麦輸入が増加するのは、同じ飼料穀物であるエン麦と大麦の輸入関税率に大きな開きがあったこと、及び輸入証明書制度の導入によるものである。1906年の時点で、飼料用大麦の輸入関税が100キロ当り1.3マルクなのに対して、エン麦のそれは5マルクであった⁽¹⁵⁾。

エン麦と大麦(特に飼料用)とで、このように関税率に大きな開きが

あったのは次のような事情による。ドイツ国内でエン麦を栽培していたのは、主として、それを飼料とする馬の飼育をも兼営していた、東部の大農場経営（ユンカー経営）であった。一方、大麦の栽培は南部に集中していた。そして、小規模な農業経営者が飼料を購入する場合（例えば、西部の養豚）、大麦を用いることが多かった。その結果、東部におけるエン麦栽培の保護と、西部の畜産への配慮とが組み合わせられて、エン麦と大麦との関税率の格差が生じたのである⁽¹⁶⁾。

輸入証明書制度は、穀物の輸出量に応じて、穀物の輸入を無関税で認めるもので、1894年に導入され（同一種類の穀物についてのみ認める）、更に1902年には穀物の種類を問わなくなった。輸入証明書は一種の有価証券として他人に譲渡され得た⁽¹⁷⁾。こうて、関税率の高いエン麦の輸出が増え、その代りに関税率の低い大麦の輸入が増加することになったのである。ドイツへの大麦の供給を一手に引き受けていたと言っても良いのがロシアである。第一次大戦前には、ドイツの飼料用大麦の輸入の94%以上をロシアが占めていたと言われる⁽¹⁸⁾。

ドイツでは、ライ麦の輸入に対する関税率が、小麦のそれに等しいか又はやや下回る高さに設定されていたため、国内の価格が押し上げられ、ライ麦の生産が増加する傾向にあった。特に、1890年代以後、ライ麦の生産量が急増する⁽¹⁹⁾。栽培地域は、元々ライ麦の成育に適していたドイツ東部が中心であった。しかしながら、ドイツでも、パンの原料は次第にライ麦から小麦に移行する趨勢にあった。加えて、輸入証明書制度の影響もあって、ドイツにおいてライ麦の輸出圧力が高まってゆく⁽²⁰⁾。ドイツの最大のライ麦（粉）輸出先はロシア（ロシア領フィンランドを含む）であった⁽²¹⁾。ロシアがドイツからライ麦を輸入したのは、国内でライ麦が不足していたからではなく、西部の消費地がドイツに地理的に近く、輸送費が安くついたからである⁽²²⁾。もっともドイツのライ麦輸入は減少しながらも存続していて、そこに占めるロシアの比重は圧倒的であった。

19世紀半ば頃におけるロシア産エン麦の主要な輸出先はイギリスであった。しかし、次第にドイツの比重が増してゆき、第一次大戦に近づくにつれ、ドイツが最大の輸出先になる⁽²³⁾。ドイツの側から見ても、エン麦の最大の供給国はロシアであった。但し、次第にアルゼンチンが台頭

しつつあり、又、前述のごとく、ドイツ国内の飼料用穀物がエン麦から大麦・トウモロコシに移行する傾向にあった。更に、ドイツからのエン麦輸出も増加して、国際市場でロシアのライバルになろうとしていた。ドイツ国内でのエン麦生産量も、1890年代後半以後急増している⁽²⁴⁾。このように、ロシアからドイツへのエン麦輸出は、決して先行きが明るくなかったのである。

注

- (1) Русский экспорт, 1913, No. 1, стр. 6
 〈Русский экспорт〉は、Российская Экспортная Палатаが発行した定期刊行物(論文集)である。ツガン=バラノフスキーなども寄稿している。この資料は、ヘルシンキ大学付属図書館で収集したものである。
- (2) M. E. Falkus, op. cit., pp. 424—5
- (3) ロシアの小麦輸出の問題点と課題は次の点にあった。ロシアの経済的・金融的事情が小麦輸出を不可避なものとしているため、世界市場での価格の如何にかかわらず、輸出しなければならなかった。このために、独露穀物貿易においても、ロシアは不利な立場に立たされていた。このような状況から抜け出すためには、第1に国内の穀物取引を整備せねばならない。つまり、信用と貯蔵設備(エレベーター)を整備して、国内に穀物を保持する方策を講じねばならなかった。又、ドイツだけに依存するのではなく、新たな輸出市場の開拓が迫られていた(П. И. Лященко. указ. соч., стр. 159)。ロシアの穀物輸出促進策については他にも多くの資料がある。例えば、Вестник Финансов, промышленности и торговли, 1915, No. 7, стр. 297。この点については稿を改めて格闘したい。
- (4) Русский экспорт, 1911, No. 1, стр. 7
- (5) ロシアの穀粉輸出、とりわけ西欧へのそれが振るわなかったこと、更には、従来のロシアの穀粉輸出市場(例えばフィンランド)での競争の激化(特にドイツの進出)については、ここでは直接取り扱わない。
- (6) 農業総合研究所『世界農産物貿易統計集』(昭和53年)73ページ、有馬達郎「19世紀末ロシアの貿易構造の特質—穀物輸出を中心として—」(『新潟大学教養部研究紀要』第12集, 1981年)60ページ
- (7) ミカエル・トレイシー『西欧の農業—1880年以降の危機と適応—』(阿曾村・瀬崎訳, 農林水産業生産性向上会議, 昭和41年), 17—8ページ

19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出

- (8) M. E. Falkus, op. cit., pp. 427—8
- (9) Ibid., p. 424
- (10) トレイシー, 前掲書, 65—6ページ
- (11) M. E. Falkus, op. cit., 426—7
- (12) 有馬達郎, 前掲論文, 64ページ
- (13) M. E. Falkus, op. cit., pp. 425—6
- (14) Русский экспорт, 1912, No. 3, стр. 86
ドイツの穀物(粉)輸出, とりわけロシア(フィンランド)への輸出については、伊藤昌太「ロシア帝国主義とフィンランド市場問題」(上), (下) (『福大史学』第33, 34号, 1982年)を参照されたい。
- (15) トレイシー, 前掲書, 88ページ
- (16) S. B. Webb, Agricultural Protection in Wilhelminian Germany: Forging an Empire with Pork and Rye, The Journal of Economic History, vol. 42, No. 2, 1982, pp. 313—4
伊藤昌太氏は、独露穀物貿易を関税政策問題と関わらしめて、数多くの論稿をあらわしておられる。例えば、「19世紀末独露通商対立と1894年の通商航海条約」(『西洋史研究』新輯第1号, 1972年), 「1916年連合国パリ経済会議とロシアの通商政策」(上), (中), (下) (『福島大学教育学部論集』第29, 30, 31号の1(社会科学), 昭和52, 53, 54年)などである。あわせて参照されたい。
なお、関税問題については、独露関税改訂問題をも含めて、稿を改めて検討したい。又、ロシアの穀物輸出市場としてドイツの重要性が高まるにつれて、その否定的側面や、独露貿易においてドイツとロシアのどちらがより依存度が強いかといった議論が盛んに行われるようになる。これは、関税問題とも密接に関連していた。但し、本稿では、これ以上詳しく取り上げない。いずれその機会があるであろう。
- (17) Вестник финансов, промышленности и торговли, 1914, No. 40, стр. 6
トレイシー, 前掲書, 101—2ページ
- (18) Русский экспорт, 1912, No. 3, стр. 86—7
- (19) B. R. Mitchell, European Historical Statistics 1750—1970. (London, 1975) p. 241, 254
- (20) トレイシー, 前掲書, 104ページ
- (21) Русский экспорт, 1912, No. 3, стр. 85—6
- (22) П. И. Лященко, указ. соч., стр. 169—70
- (23) Там же, стр. 177—8

(24) B. R. Mitchell, op. cit., p. 241, 254.

おわりに

これまで、ロシアから穀物を輸入する主要な国々の市場(貿易)状況を検討してきた。その結果次のように言えよう。輸入穀物の中では、小麦が断然重要な地位を占めていた。その小麦の世界市場(ヨーロッパを中心とした)は、1880年代頃から、合衆国、ロシア、ルーマニア、更にカナダ、アルゼンチン、オーストラリアなどの輸出国が互いに激しく競争するようになる⁽¹⁾。特に、1870年代頃までロシア産小麦の主要な輸入国であったイギリスにおいて、ロシアの退潮は顕著であった。又、多くの穀物輸入国において、農産物(小麦を中心とする)に対する保護関税主義が台頭していった。ロシアの地位は決して安泰ではなかったのである。

ライ麦の場合、一方では世界穀物貿易におけるライ麦の取引自体が著しく低下してゆき、他方、かつてはロシアがライ麦輸出を一手に引き受けていた観があったが、次第にドイツが台頭し、第一次大戦前には遂にロシアを抜いて、第1位の輸出国になる。

飼料用穀物としてのエン麦については、各国ともロシアからの輸入が一定程度維持されていたが、アルゼンチンという強力なライバルが登場しつつあった。

更に、小麦(粉)、ライ麦(粉)、エン麦では、ロシアからそれらを大量に輸入していた国自身が、保護主義の下で、国内での生産を増やし、そして輸出するまでになり、ロシアにとって脅威的な存在になりつつあった。

このような状況の中で、大麦だけは、飼料用をはじめとして需要が急速に高まりつつあり、しかも供給者として、ロシアが優位を占め得たのである。

ロシアは、農奴解放直後の1860—70年代に急速な工業化の時期を迎えたが、従来の貿易ではその要求に応じられないことが明白となった。貿易収支が大幅赤字に転落したことがそれを示している。そこで、一旦頓挫した工業化過程を再び軌道に乗せ更に一層推進するためには、貿易構造の転換、つまり穀物を中心とした食料品輸出体制の成立が不可欠であ

った⁽²⁾。

その場合、穀物輸出の中軸となるのは、国際的に大きな需要が見込まれ、かつロシアにとって競争上優位に立ち得るものでなければならなかった。小麦と大麦がそれであった。つまり、世界穀物市場の状況、とりわけロシアから穀物を輸入する国々の市場状況（貿易動向）の変化に対応するかたちで、ロシアの穀物輸出構造が変遷していったと言えよう。それは同時に、ロシアが資本主義世界体制により深く組み込まれることを意味した。

注

- (1) 前記の拙稿「世界市場とロシア農業」〔『ロシア帝国主義研究（仮題）』（ミネラルヴァ書房より1985年に出版予定）の第1章(3)に収録〕を参照。
- (2) ロシアが、貿易構造の転換を、意図的・主体的に行ったということよりも、結果としてそうなった、つまり当時のロシア資本主義にとってはその道しかなかったという意味をも含めてのことである。